

5	小牧	小牧市立小牧原小学校	藤村 昭文
---	----	------------	-------

分科会番号	1 4	分科会名	特別支援教育
-------	-----	------	--------

研究題目

「一人一人の成長を目指した指導方法や連携の在り方の研究」
—小牧市特別支援教育研究会での活動を通して—

研究要項

1 はじめに

小牧市特別支援教育研究会（以後、教育研究会）は、児童生徒の成長を目指して指導方法を研究し、長年に渡り小中学校で連携して指導に取り組んできた。小中学校で連携することによって、子どもの成長過程や課題を共有し、それぞれの児童生徒の個性に合わせて、切れ目のない支援をねらいとしている。

教育研究会では、特別支援学校の先生を招いて、各校の実践報告や困り事などを発表し、助言をいただきながら指導方法や解決方法などを話し合っている。とても有意義な時間となっている。また、多くの児童生徒が関わっている療育機関との連携の在り方についても考え始めた。児童生徒に関わる全ての人が連携をしなければいけないと考えているからである。昨年度は、療育機関の方を招いて、児童発達支援放課後等デイサービスや保育所訪問支援の現状や仕組みについての講演会を行った。

今回は、この教育研究会で得た助言や解決方法、療育機関との連携について実践して、「一人一人の成長を目指した指導方法や連携の在り方の研究」を行った。

2 研究の実践

（１）一人一人の成長を目指した指導方法

本校の課題として、筆圧に関する指導方法を相談した。特別支援学校の先生からの助言として、

- ・感覚統合の力を身に付けることが大切。効果的な活動として、トンネルくぐり、雑巾がけなどが効果的である。
- ・6歳までに感覚統合を身に付けられると良い。身体のバランスを鍛えることが大切である。
- ・はじめは、ペンを使って書く。力の入れ具合を知る活動を行うことが必要である。効果的な活動として、積み木を使った活動が有効的である。
- ・手首が滑らかに動くようになると箸やスプーン、鉛筆を正しく持つことができる。

この助言をいただき、「感覚統合」の重要性を感じ、実践した。

—研究の内容—

① 目指す児童像

学習や日常生活で、なるべく困り事が生じることなく活動できる子

② 研究の仮説

【仮説１】 さまざま経験を積みせることで、児童の課題が少しずつ改善されて、自信をもち安心して活動ができるようになるだろう。

【仮説 2】 児童の課題を一つに絞らずに、その他の課題も合わせることで児童の成長につながるだろう。

—研究の実践—

本学級は特別支援（自閉症・情緒障害）学級であり、第 4 学年 2 名、第 2 学年 3 名、第 1 学年 1 名が在籍している。全員が日常生活において、動きにぎこちなさがあり、それに伴うまくいかないと癇癪を起すことがあった。その中でも、第 1 学年 1 名を抽出した。

〔児童 A〕

会話はできるが、字が書けない。知的な遅れもある。集中力が続かずにすぐに他事をしてしまう。また、すぐに諦める。姿勢の維持も難しい。言葉での指示より、視覚からの指示が有効である。

まずは、週 2 時間ある自立活動で、自立活動の内容 6 区分の「人間関係の形成」「身体の動き」「コミュニケーション」に関するを中心に行った。

学校での活動や日常生活で、身体の動きが円滑に行われることは重要であり、また姿勢を保つことや字を書くことも、身体的な能力が必要であると考えた。その手立てとして、

- ・体全体の訓練として、感覚統合を高める運動や動画・音楽に合わせて踊る活動。※ 1
- ・手、指先に絞った訓練として、新聞紙、おはじきなどを使った活動。※ 2

動画を使うことで、児童 A は喜んで活動した。また、学級全体でも自立活動の授業の時間だけではなく、朝の会で、動画を見ながらラジオ体操などの運動を行っていたので、動画を見ながら体を動かすことに抵抗感なく活動できた。また、教員も一緒に行い、わざと動きを間違えて、間違えることは当たり前であると思わせるような、手立ても行った。新聞紙を使った活動では、主に指だけで新聞紙を手繰り寄せ



※ 1 線の上を歩く



※ 2 おはじきを積む

ることや、丸める、細く破るなどの活動を行った。おはじきを使った活動では、積み上げる、つまむ、はじくなどの活動を行った。この活動時には、誰が一番積み上げたのか、一番遠くにはじいたのかを競わせた。競わせることで、真剣になって取り組む児童が多かったが、上手くできなかった児童は、怒ったり、やらなくなったりした。これは、予想していたことで、あえて負荷を掛けて、その児童の課題に対して、指導していく機会とした。

（「情緒の安定に関すること」）児童 A は、諦めてやらないという行動になったが、やらないとできないこと、失敗してもよいことなどを伝えた。この様子から、活動を止めない工夫として、同じ活動、作業を長い時間行うことはやめて、短い時間で、さまざまな活動を行った。そうすることで、失敗をしても次へ進み、気持ちの切り替えができ、活動を続けることができた。これは、児童 A のみではなく、全体を通じて集中力を保ったまま活動ができた。

また、「身体の動き」だけでなく、「人間関係の形成」「コミュニケーション」の区分を取り入れた、仲間とのつながりを意識した活動も行った。自立活動の時間は、3 学級合同で行っているため、学級を 1 つのグループと考えて集団を意識させるように行った。表現運動を取り入れ、「海の中の生き物」などの課題を与え、各学級に発表させて、役割やどのように表現するのかを話し合う活動をした。※ 3



※ 3 学級発表の様子

この活動では、集団で行動することに重きを置いて進めた。話し合いでは、児童たちだけにはしないで教員が近くで様子を見て、どのように進めればよいかを指導しながら活動した。まずは、話し合いの手順が分からないので、その手順を教えながら、繰り返し行った。動きに関しても、指導を行わず、自由にさせた。とても面白い表現をする児童が多く、楽しい時間となった。児童Aは、上学年の児童に指示されながら表現運動を行っていた。その中で、「いいね。」や「すごいね。面白かったよ。」と級友に言われて嬉しそうな児童Aが見られた。

—成果と課題—

児童Aは、3学期には字が書けるようになってきた。筆圧も高まってきた。単純に字を書かせるだけではなく、感覚統合を意識した活動を取り入れることで成果があったと考える。また、児童同士のつながりを意識させることで、話を聞くこと、話をしている人の気持ちを考えることの重要性に気付く、聞く姿勢に関しては、改善が見られた。このことから、継続した活動や人と関わり合いながらの活動の有効性を感じた。

課題として、すぐに効果を感じることができず、続けてよいか不安に感じてしまう。今後も児童の特性や現状を見極め、保護者とも確認をしながら進めていきたい。

(2) 療育機関との連携の在り方の研究

本校の特別支援学級在籍33名のうち、28名が児童発達支援放課後等デイサービスを利用している。これだけ多くの児童が関わっているが、連携しているとは感じられなかった。児童に関わっている全ての人と連携し、切れ目のない支援をすることが成長につながると考える。そこで、教育研究会にて療育機関との連携を考える一歩として療育機関の方を講師に迎え、講演会を行った。

その講演の内容は、

- ・各事業所によって基本理念がある。
- ・本人支援には5つ領域（健康・生活、運動・感覚、認知・行動、人間関係・社会性、言語・コミュニケーション）
- ・主な支援内容（本人支援、家族支援、移行支援、地域支援・連携）
- ・学校との連携の大切さ。主な理由として、
 - 支援の方向性を一致できる。
 - 子どもの「ちがう顔」が見えることで、新しい理解につながる。
 - 先生方にとっても、福祉的な視点でのアドバイスや相談相手として役立つ。
- ・保育所訪問支援とは、子どもをスタートラインに立てる支援をすること。

講演後には、さまざまな感想や意見があった。

《参加者の感想・意見》※原文のまま

- ・放課後デイサービスとの連携ってまだまだたくさん課題があるなと思いました。共通の目標にめがけて、それぞれが支援を行なっていくことの大切さも感じたので、少しでも力になれるよう、今後も試行錯誤をしていきたいと思います。
- ・以前は学校と家庭の信頼関係でしたが、今は病院やデイサービス、内容によっては児童相談所など、多くの専門機関との連携も可能になっています。担任や学校だけでは踏み込めない範囲に専門機関の方々が入っていただけると、とても助かります。生徒からデイサービスの活動について聞くこともよくあります。生徒たちが楽しめる活動がたくさんあって私も勉強になります。
- ・保育所等訪問支援の事をあまりよく知らなかったなので、勉強になりました。

多くの先生が、連携の必要性を感じているようだった。また、保育所等訪問支援を知らない先生が多かった。今後の課題であると感じた。

また、療育機関としても、連携を望んでいることも分かった。この講演後、本校も療育機関との連携についての実践を進めた。

—研究の内容—

① 目指す児童像

気持ちの浮き沈みがなく、安心して学校や放課後等デイサービス（以後、デイサービス）で活動できる子

② 研究の仮説

【仮説１】 学校と療育機関との間で、児童の様子について確認することで、児童理解が深まり、より児童に合った支援ができるようになるだろう。

—研究の実践—

〔児童Ｂ〕

家と学校で、様子が違う。家では、堂々としていて少し暴力的である。学校では、決められたことを、黙々と行っている。恥ずかしがり、自分からあまり話しかけない。大人に話しかけることが多い。見通しが立たないことがあると気持ちが不安定になる。決めたことは、必ず行う。

まずは、デイサービスの方に、施設での様子を尋ねた。施設では、デイサービスの先生とお話をよくして、明るい性格であるとのことだった。家・学校・デイサービスで、それぞれ違う様子であることが分かった。そして、学校では、家やデイサービスでの出来事を話さないことを伝えた。デイサービスでも、学校や家での出来事を話さないとのことだった。この特性から、学校で不安なことがあった時は、報告をした。このような時は、施設でおとなしいようであった。家庭では、少し気性が荒くなった。この状況を確認したので、本人に何かあった時には報告し、デイサービスでの対応の仕方を短い時間ではあるが意見交換をした。ここでは、何に不安を感じているのか、今後の学校での対応の仕方、デイサービスでの支援方法などを話し合った。これを繰り返すうちに、この児童に何かあった時、デイサービスの方が児童を見て、すぐに「何かありましたか。」と気付く方もいた。デイサービス側も児童理解が深まったことを感じた。

〔児童Ｃ〕

療育手帳Ｂ 会話が難しい。意思の疎通が難しい。じっとしていられなくて、すぐに集団から離れてしまう。思い通りにいかないと大きな声を出して暴れる。運動も苦手であり、体育を嫌がる。週２時間の体育の授業で保育所等訪問支援（以後、訪問支援）を受けている。

以前までは、訪問支援を開始する前に、担当者との打ち合わせを行い、どのような支援を行うかを確認していた。当日の授業前は挨拶程度であった。しかし、講演会以後は、授業前に授業の内容を確認して、児童Ｃに何をさせていくのかを話し合った。前提として、スモールステップで進めることを確認した。授業後も、児童Ｃの様子や、次の手立てについて確認した。

訪問支援員は、活動の全てに手を貸すのではなく、その児童がどうやったら取り組めるかの手助けをした。縄跳びの授業では、その時間で跳べるようにするのではなく、縄跳びを持つことから始めていくことを支援した。そのために、列から離れないように声かけを行い、また児童Ｃの近くに縄跳びを置いてあげることを続けた。３学期には、跳べることはできないが、持って回すことはできるようになった。児童Ｃは、「できた。」と言いながら笑顔であった。

—成果と課題—

デイサービスでの様子を知るとは、とても重要であり、また学校での様子を伝えることも、お互いに児童理解が深まり有効であると感じた。児童Bは、不安なことがある時に、学校・デイサービス・家庭において支援を受けることで見通しがもてるようになり、3学期は落ち着いて過ごせることが多くなった。落ち着いて過ごせることで、普段の活動が円滑に行われ、成長に役立っていると実感した。児童支援の方向性を一致させることは、児童の気持ちを安定させるのに欠かせないものであると考える。

訪問支援では、何をするのか、どのように支援をするのかを確認することで、児童Cがその授業でできることが多くなり、褒められることが多くなった。自己肯定感も高めることができ、体育に対しての嫌悪感も減った。

課題として、多くの児童が療育機関と関わっているのも、すべての児童の療育機関と話し合う時間を確保することが難しい。また、療育機関によっても差があり、協力的ではないところもある。この課題をどのように解決していくかを今後も考えていきたい。

3 研究の成果と考察

教育研究会で助言をいただいたことを基に、児童の指導方法・支援方法を考え、実践した。児童Aの実践は、感覚統合を高めていくだけでなく、その他の課題の支援方法も含めて行った。その他の課題への支援方法も以前に、助言をいただいたものを取り入れながら行った。児童Aの特性である、視覚からの情報を得やすいため、動画を使用したことや飽きやすいので短い時間で多くの活動を取り入れるなどを組み合わせた。児童Aは、字を書けるようになり、姿勢の維持の改善も見られた。そこには、児童の特性に合わせながら、継続的に支援・指導を行い、人と関わり合いながら進めることで成果を得られたと考える。

療育機関との連携に関しては、学校とデイサービスで情報を共有することで、お互いに児童理解が深まり、より一人一人に合った支援ができることを実感した。児童Bが支援の方向性を一致させることで児童が安心することも分かった。児童訪問支援は、児童の自己肯定感を高めるのに有効であると感じた。児童Cだけでなく、訪問支援を利用しているその他の児童でも、その授業で出来たことが増え、達成感を感じて笑顔で授業を終えることが多かった。改めて、児童の近くに支援する人がいるということは、とても重要であると分かった。訪問支援という制度があるならば、その制度を利用する児童生徒がより成長できるよう、学校としてもより良い連携を目指していきたい。

4 おわりに

教育研究会は、特別支援学校の先生を招いて、相談や指導を受けられる貴重な時間となっている。昨年度のふり返りにも、今後も特別支援学校の先生からの助言をいただきたいという意見がほとんどだった。また各校においても、助言を基に実践を行い、成果を感じている先生が多く見られた。今後も続けていきたい。

今までは、小中学校の縦の連携を主にしていたが、昨年度は療育機関などの横との連携をテーマに挙げた。講演会を行い、デイサービスの現状を知ることができ、特に訪問支援を利用している児童生徒がいない学校の先生には有意義な時間となった。療育機関によって差があることや話し合いをする時間の確保など課題はあるが、今出来ることを取り組み、児童生徒が成長できる最善策を考えていく場にしていきたい。その他にも医療機関との連携や昨年度のふり返りに通常学級（交流学級）との連携についての意見もあった。児童生徒に関わる全ての人が連携することが重要であると考えているので、今後教育研究会で考えていきたい。

年々、支援を必要とする児童生徒は増加している。通常学級でも児童生徒の支援方法に悩んでいる先生もいて、特別支援教育に対する重要性は高まっていると感じている。今年度の教育研究会では、特別支援学級の担任や通級指導教室の先生だけでなく、通常学級の担任も参加している。立場の違う先生方も参加して、さまざまな意見や考えを話し合いながら、今後もこの教育研究会を通して、児童生徒に関わる人と連携しながら、一人一人の成長を目指した指導方法を行い、児童生徒を成長させられるようにしていきたい。